

セッション F 「啓蒙の遺産—寛容・穏健・包括性」

世話人：田中秀夫（愛知学院大学）

司 会：奥田敬（甲南大学）

報告 1：田中秀夫（愛知学院大学） 大ブリテンの場合

報告 2：喜多見洋（大阪産業大学） フランスの場合

討論者：生越利昭（兵庫県立大学・名誉）・米田昇平（下関市立大学）

報告 1 大ブリテンの場合 排除から抱擁へ、あるいは急進から穏健、保守へ 田中秀夫

ヴォルテールは『イギリス便り』（1733）で信仰の自由を賛美した。彼はイギリスでは公職に就くためには国教徒でなければならず、非国教徒は人口の 20 分の 1 にも満たないと指摘している。名誉革命後に実現した寛容は、限定的寛容であった。

チューダー朝は寛容な時代ではなかった。人文主義の華が開き、シェークスピアやモア、トマス・スミス、ベーコンなどが活躍したが、モアは国王の離婚に反対し処刑された。ヘンリ 8 世は国家教会制へと舵を切った。スコットランドの宗教改革は長老派支配となり、カルヴィニズムが浸透し、武勇の精神と勤労の精神が文化的伝統となる。

やがてステュアート家のジェームズ 6 世がイングランドの王位に就く。チャールズは議会を招集せずに独裁政治を行い、批判者は高等法院星室庁が容赦なく処罰した。1740 年にチャールズは議会を招集するが、国王と議員は対立し、長期議会で長老派が優勢となり検閲制度を考えた。ミルトンは『アレオパジティカ』（1644）で抗議した。党争のなか、国王チャールズを処刑し、独立派クロムエルが支配権を握る。

内戦は不毛だが豊かな思想を生む。17 世紀の英国はベーコンからニュートンまで天才が目白押しである。ラブレーやモンテーニュを生んだフランスの宗教戦争時代も思想の生産性を示した。スペインに抵抗したオランダでもエラスムスからグロティウス、スピノザまで知的巨人が輩出した。

反動の王政復古体制を覆したのはシャーフツベリ 1 世などの亡命者とオレンジ公ウィレムであった。名誉革命によって権利章典と寛容法が制定された。ロックは『統治論』（1690）で体制の骨格を描き、『寛容書簡』で寛容を説いた。1695 年に出版統制が消滅し、言論出版の自由の時代となる。革命は議会における国王という形で決着し、イングランド銀行の設立と財政軍事国家の形成、合邦によるスコットランドの馴致によって、植民地海洋帝国を展望する。スコットランドの貴顕は夏場以外はロンドンに住むが、法、宗教、大学が保存されたためにエディンバラは繁栄する。経済改良が国民を巻き込み、政治と文化のイングランド化が進む。

アン女王時代からウォルポール時代にかけて激しい論争が巻き起こる（オーガスタン時代）。金権腐敗も目立つ。筆禍事件は頻繁に起こり、出版人が逮捕されるものの赦免される。イングランドはディセンターに譲歩する。タッカー『帰化論』は 1751 年に出版され、1753 年にニューカッスル政権がユダヤ人帰化法を提案した。民衆の抗議で撤回したが、アメリカの解放、奴隷解放、カトリック解放が課題となる。抱擁と寛容の穏健主義の時代となる。イングランド啓蒙は急進的啓蒙から始まり、18 世紀の半ばに穏健な啓蒙となり、世紀末に保守的啓蒙（ポーコック）に転化する。

スコットランドではカトリックや監督派は少数派であった。ジャコバイトとウィッグ、長老派内の民衆派と穏健派の対立があった。貧困からの脱出が国民的課題で、改良運動、大学改革、法改革などが一体となって、ジャコバイト主義の克服と啓蒙へとつながった。1745 年以後は穏健派の時代となり、ビュート卿やマンズフィールド卿がロンドンで影響力をもつ時代が啓蒙のピークである。パトロネジと利権は精神の腐敗を生む。アメリカ問題が深刻化するなかで、穏健派は既得権に泥んで民衆の支持を失い、民衆派が再びヘゲモニーを握る。フランス革命が反動の時代を招き、啓蒙は

終焉する。

報告 2 フランスの場合 J.B.セーを通して見た啓蒙の遺産 喜多見洋 (大阪産業大学)

啓蒙の遺産を考えると、フランスの場合はフランス革命がかかわってくる。18世紀のJ.B.セーを事例として「啓蒙の遺産」について検討すると次のことが明らかになる。

セーの家はプロテスタントの家系で教育熱心であり、彼は伝統にとらわれず、新しい科学、知識、学問、技術に関心が強い「啓蒙」的な環境で生まれ育った。大人になってからのセーは、自分自身が啓蒙の動きにかかわる。すでに彼はフランス革命の直前に「精神の光」、「理性の支配」といった啓蒙のキーワードがちりばめられた小冊子「出版の自由」を著わしており、18世紀フランスの啓蒙の思潮の中で考え、主張していた。革命が始まってからも彼は、ミラボールの『プロヴァンス通信』の事務所で働き、ジュネーヴ人脈、ジロンド派に近い人脈の中で革命にかかわっている。1794年に『デカド』の編集を担当するようになると、彼は啓蒙の世紀の思想潮流の中で考えつつ、イデオログの立場からフランクリンの思想の紹介、普及にたずさわり、黒人友の会の活動にも関与し、「一国の習俗を改良する手段」について考察した『オルビー』を著わす。彼にとってはテルミドール反動後の政治的、社会的状況の変化を受けて、彼の中で18世紀の啓蒙とフランス革命が生み出したものをどうやって護るか、社会をいかに再編成し、安定させるかということが重要な関心事となった。

ただし、セーが関わっていた啓蒙、それはグローバルな啓蒙だった。彼は、イギリスとのつながりを活かしH.M.ウィリアムズの『新スイス旅行記』(1798)を英語から翻訳したり、あるいはフランクリンの思想を紹介したりしてグローバルな形で「啓蒙の世紀末」に知的活動を展開しており、その活動は国境を越えた知的ネットワークをベースにし、それをうまく利用したものだ。この点は、セーだけでなく彼の一族をあわせて考えると一層明確になる。

セーは18世紀全体を有意義な世紀と考えており、18世紀の最後の10年における、革命の行き過ぎの部分「恐ろしい革命」とする一方で、最後の10年を「美しい時代」「最も偉大な結果をもたらすだろう時代」として評価している。セーは、今まで考えられていた以上にフランス革命を意識し、それと深く関わっていたのであり、「18世紀が成し遂げたこと」、「フランス革命が成し遂げたこと」を護ろうとしている点で彼は、啓蒙を受け継いでおり、「啓蒙の遺産」を護ることに尽力したと考えられる。

田中秀夫報告へのコメント・質問

生越利昭 (元兵庫県立大学)

第一に、「寛容・穏健・包括性」の具体的表現をどこに見出すか？「寛容」の展開は、世界の合理的解明、旧秩序からの個人の解放、物質的自立という啓蒙の内実とも連関し、個人の解放を基盤とした「欲望の肯定」、「社会的自由」、個人の内面的自立を保障する「良心の自由」や「信仰の自由」という形で表現され、これに対する抑圧に対する抵抗と不可分の関係にある。

第二に、イギリスにおける啓蒙の起点をどこに求めるか？「個人解放」と「自由」の明確な主張は、レヴェラーズによる「不可侵の自然権(プロパティ)」(「良心の自由」や「言論・出版・集会の自由」を含む)に見られる。ただし、ポコックのように、理神論を啓蒙の起点とみなす見解もある。

第三に、宗教的寛容と国家体制との関連をどのように考えたらよいか？寛容は本来、個人的信条・自由の容認であり、国家の枠を超えた普遍的なものだが、イギリスにおいては、国家と教会の一体化を図る国教会体制の下で、寛容は共同体秩序維持のために常に制約されてきた。この制約を突破できない限り、啓蒙には限界があるのではないか。

喜多見洋報告へのコメント 米田昇平 (下関市立大学)

喜多見報告は、ジュネーヴ人脈に属し、啓蒙のネットワークのなかで青年期を過ごしたセーの『オルビー』執筆までの遍歴をたどりつつ、フランスにおける啓蒙の遺産の継承のあり方に光を当てようとするものである。フランスの場合、啓蒙思想（穏健な啓蒙、急進的啓蒙、ルソー主義）は思想を試す実践の場でもあった革命の試練にさらされるが、18世紀の啓蒙はこの試練をどのようにくぐり抜け、何を遺産として残したか。ジャコバン独裁の終焉後にジロンド派が息を吹き返すが、これとともに登場したのが、イデオログと呼ばれる人々であり（デスチュット・ド・トラシなど）、セーが経済学に向かうのもこのような文脈においてであった。革命の理念を失わずに革命後のフランス社会をどのように再編成するか、彼らはそうした革命後の新たな社会的結合を「産業社会」の建設によって果たそうとしたが、これは穏健な啓蒙と親和的な18世紀の啓蒙の経済学を受け継ぐものであった。この意味で、報告者の関心を引き継いでいえば、トラシやセーの産業主義は啓蒙の遺産を継承するフランス的な一つのあり方を示すものであったとみなすことができるであろう。

フロアからの発言と討論：司会者 奥田敬（甲南大学）

まず寺田元一会員から、(ディドロ的な「編集知」の先蹤たる)ピエール・ベールの寛容論への注意が喚起された。続いて有江大介会員が啓蒙の「遺産」ならぬその現代的意義を問いかけ、田中秀夫会員はグローバリズムの起点を再考する必要性を強調した。星野彰男会員からも、シュンペーターがスミスの経済学を軽視・酷評したのは、啓蒙の遺産という視点の欠落によるのではないかという指摘が寄せられた。さらに安藤裕介会員がイデオログとの関係について質問したのに対し、喜多見洋会員はフランス革命の光と影を直視しながら啓蒙の遺産を守り抜いたところにセーの真骨頂が存することを示した。最後に坂本達哉会員から、ミルの『自由論』の論法をもってすれば、現代日本では同性婚への対応が寛容の試金石となろうというコメントがあった。

出席者は40名弱、時間不足で不完全燃焼気味の議論になったのは残念だが、「啓蒙の年代記と地誌」に完結はないという思いを誰もが抱いたのではないだろうか。個人的には、啓蒙のコスモポリタニズムとパトリオティズムは表裏一体をなすというヴェントゥーリの洞察を改めて想起した次第である。